

インテグラル思想研究会

Vision Logic の 3 段階：Strategist～Alchemist (Part Two)

鈴木 規夫 Ph. D. (Norio001@nifty.com)

2006 年 11 月 26 日 (土曜日)

上記のように、真の意味でVision Logic (VL) と形容しえる意識構造は、**Strategist** 段階においてはじめて構築されるということができよう。そうした意識構造は、多様な視野を尊重するのみならず、また、それらを普遍性という文脈のなかでとらえなおすことをとおして、相互の関係性を認識する。こうした統合的な能力を発揮することができる時、その意識構造は、はじめてVLと形容しえるのである。

また、上記のように、こうした意識構造は、組織活動の領域において、非常に特徴的な行動を展開する。普遍的な価値にたいする信頼を基盤として自己の全存在を活動に投資することのできるその能力は、この意識構造にすぐれた創造性をもたらすことになる。これは、**Individualist** 段階の問題である「自己にたいする執着」(“hyper-individualism”) (Griffin, 1989) から意識を開放して、**Strategists** に共同作業への献身的な参画を可能とすることになるのである。

しかし、あらゆる意識構造がそうであるように、**Strategist** 段階も、また、独自の構造的な問題を内蔵している。敢えていえば、それは、成長という命題を絶対化することが必然的にもたらす自己と他者にたいする「非寛容」といえるだろう。

具体的には、それは、自らの潜在的可能性を完全に実現することができないことにたいする恐怖、または、自らが認識・信奉する普遍的な価値(例：寛容・正義・尊厳)を実際に尊重することができないことにたいする恐怖ということのできるだろう。**Strategist** 段階の特徴である「自己成長」・「自己実現」への真摯な取り組みは、時として、こうした恐怖が現実のものとなる時、**Strategists** の内部に深刻な鬱状態を醸成することになる。

また、**Strategists** のこうした成長への取り組みは、自己のみならず、他者にたいする関心としても表現されることになる。**Strategists** は、しばしば、他者の自己実現の支援にすぐれた能力を発揮する。しかし、こちらの献身的な支援にもかかわらず、成長にたいする抵抗を経験するとき(例：相手が成長にたいする意志を発揮しないとき・相手が効率的に成長することができないとき)、**Strategists** は、しばしば、そうした「怠惰」にたいして攻撃的になる傾向がある。自己にたいしてそうであるように、**Strategists** は、成長の可能性の拒絶に直面するとき、寛容であることができないのである。

「成長」という命題を絶対化することによりもたらされる自己、そして、他者との緊張関係は、**Strategists** にこの意識構造を対象化する契機を提供することに

なる。¹そして、Strategist段階におけるこうした構造的な問題と対峙することをおして、意識深化の過程は、いわゆる「トランスパーソナル」段階へと向かっていくことになるのである。

Alchemist段階 (5/6)

Susanne Cook-Greuter (2002) は、パーソナル段階からトランスパーソナル段階への移行段階を“Alchemist”段階、または、“Construct-Aware”段階と形容している。

この段階においては、体験というものが本質的に「自己」(“I”)という機能をおして「構築」されるものであることが認識される。つまり、体験というものが、世界(内的・外的)をありのままに把握するのではなく、体験主体である自己という解釈機能をおして、それを再構築する行為であることが認識されるのである。

とりわけ、ここでは、体験というものが言葉により強力に規定されるものであることが認識される。人間が、言葉をおして、世界を「恒久的」(permanent)・「客観的」(objective)なものとして設定しようとする根源的な衝動にもとづいて生きる生物であることが洞察され、また、言語活動が、世界の本質である混沌に秩序をあたえる解釈行為であることが認識されるのである(“...reality is now understood as the undifferentiated phenomenological continuum or chaos...”)。つまり、体験というものが、本質的に、人間をありのままの世界から疎外するものとならざるをえないことが実感されるのである。

全ての人間は、混沌とした世界と対峙する存在であるという意味において、結ばれている。しかし、同時に、自己という装置をおして体験を構築することをおして、相互から疎外されている存在でもある。個人・個人は、自己の認識機能をおしてしか世界を体験することはできない。そして、それぞれの認識機能の枠組は完全に同じであることはないのである。

混沌から秩序を創造するという人間意識の本質的な機能にたいする洞察にもとづいて、人間存在の根本的な制約条件と対峙することをおして、パーソナル段階からトランスパーソナル段階への移行が展開していくことになる。

人間性との対峙

上記のような人間意識の根源的な機能にたいする洞察は、Alchemistsの内部に、認識行為というものが、本質的に、自己を機軸として展開する「自己中心的」(“ego-centric”)な行為とならざるをえないことへの問題意識を醸成することになる。ここでは、「個」であるということそのものが人間存在の制約条件として問題視されることになるのである。また、こうした洞察は、自己による認識行為を規定する「秩序の創造」にたいする批判的な精神を醸成することにもな

る。つまり、世界の把握という命題のもと、言葉を駆使して、複雑な地図を作成することの意義が懐疑されることになるのである。

Construct-Aware段階は、「意味構築活動」(“meaning-making activity”)の主体としての「個」を対象化するはじめての発達段階であるということが出来るだろう。この段階において、人間は、自己が本質的に自己保全衝動にもとづいて機能する存在であることを喝破する(こうした自己の構造的衝動は、インテグラル思想において、“Atman Project”と形容されているのは周知のところである)。彼らは、意味構築活動が本質的に解釈行為であるという意味において、窮極的には、真実は自己の活動をとおしては知ることができないことを認識するのである。ここでは、また、人間の認識を特徴づける対極的発想(例:善と悪・生と死・美と醜)が、実際には、世界を把握するための解釈の枠組にすぎないことが認識される。

こうした人間性の根本にたいする洞察を基盤として、Alchemists は人間が人間であることに起因する問題と対峙しようとする。

こうした態度は、例えば、世界を把握するための「理論」や「説明」を希求する自己の強烈な欲求との対峙として顕現する。Alchemistsは、世界を知的に把握することをとおして平衡(equilibrium)を醸成しようとする意識の自動的な習慣が、窮極的には、自己の実在感覚(sense of substantiality)を増幅しようとする、いわば、存在の本質の拒絶のころみであることを察知する(Loy, 1996)。この段階においては、あらゆる文化的な多様性を超えて機能する、こうした人間の構造的・普遍的な性質——言葉を用いて、自己の実在感覚を増幅しようとする性質——を克服することが模索されるのである。²

非言語体験の統合

人間の意識活動における言語の重要性と制約性が認識されるなかで、Alchemistsは、しばしば、非言語領域とのつながりを深めていくことになる。こうした意識の深化は、普通、直感・身体感覚・感情・夢・元型等、非言語体験の経験・統合の能力の成熟として実現する。つまり、こうした過程のなかで、Alchemistsは、世界を把握するうえで、言語のみならず、非言語的・非合理的な知恵の源泉を尊重することを重視するようになるのである。また、この段階においては、しばしば、「至高体験」といわれる瞬間的に日常的な自己の境界を超越する体験が経験されるようになる。こうした体験は、Alchemistsをさらなる意識深化へと誘うことになる。

孤独との対峙

Construct-Aware 段階において個人が直面する代表的な苦悩は、自己の洞察を共有することのできる他者を見いだすことができない可能性にたいする恐怖であるといえる(また、実際、こうした成長段階が非常に稀有のものであるという

意味においては、それが単なる杞憂ではないことはいうまでもないだろう)。自己の複雑な認識構造を共感的に共有することのできる他者を見いだすことができないことが醸成する孤独感は、時として、**Alchemists** を絶望に陥らせることになる。また、そうした自己認識が内包する自己を特別視する態度そのものを問題視することのできる **Alchemists** の批判的精神は、彼らを複雑な内省の迷路に陥らせることになる。人間の構造的な問題にたいする透徹した洞察は、こうして **Alchemists** を特有の苦悩の循環にとらえることになるのである。

このような高度の成熟の苦悩を背負う **Alchemists** にとり、それまでの成長段階を特徴づける単純さと素朴さ (*simplicity*) は、しばしば、羨望の対象として経験されることになる。しかし、この段階の精神的な成熟は、**Alchemists** に——自己の根源的な孤独と絶望を見据えながら——自らの運命を自己の責任にもとづいて果敢に抱擁することを可能とする。それは、人間としてこの世界に生命をあたえられてあることが内包する根源的な苦悩と対峙して、そして、そのなかに建設的な解決策を創造していこうとするありかたと形容することができるだろう。

関係性

人間性の本質にたいする透徹した洞察は、人間関係の領域において、**Alchemists** に非常に優れた洞察能力をもたらすことになる。**Strategists** が成長を絶対化する傾向にあるのにたいして、**Alchemists** は、成長を対象化することができているために、個人・個人をありのままに受容することができるようになるのである。

成長という価値を絶対化することは、必然的に、**Strategists** の構築する人間関係を実現志向のものにすることになる。そこでは、あくまでも、成長とは善であり、成長への可能性を抑圧することは回避されるべきであると信じられるのである。しかし、実際には、成長への可能性を実現することができたときにもたらされるのは——非常に皮肉なことに——窮極的にはそれそのものが人間の構築した虚構にすぎないということにたいする認識である。**Alchemists** は、実際に成長という虚構を生きることとおして、それが虚構にすぎないことを自覚するのである。

こうした過程を実際に完遂することは、**Alchemists** に独特の視野をもたらすことになる。それは、人間を自己の選択した「虚構」を生きる権利を有した存在として抱擁する視野であるといえる。

人間とは、自己の責任において、意味構築活動を展開しながら生きていく権利を有している。また、それぞれの意味構築活動は、この世界のなかで営まれることをとおして、本質的に、変化（深化）することを宿命づけられた営みである。世界の本質を俯瞰する視野にもとづいて、**Alchemists** は、人間というものを

刻々と深化しつづける存在として抱擁することをとおして、その自然な変化の過程に寄り添おうとするのである。

この世界において、あらゆるものは変化のただなかにあり、個人・個人はそうした文脈のなかで自己の人生を生きていくことにならざるをえない。そうした認識にもとづいて、**Alchemists** は他者を絶対的な孤独のなかで変化の過程を生きるものとして尊重するのである。

相手の内的世界にたいする洞察と尊重にねざしたこうした包容力は、人間関係の領域において、**Alchemists** にひとときわすぐれた感受性と適応性をもたらすことになる。

自己の責任にもとづいて意味構築活動に従事する存在として他者を抱擁することをとおして——つまり、相手の経験する内的世界が、その独自性において、窮極的には、こちらに理解することができないものであることを認識することをおして——**Alchemists** は、その内的世界を内部から経験するための感受性を獲得する（真の共感とは、存在の基盤である、実存的な孤独を抱擁することができて可能となるものである）。そして、これは、必然的に、**Alchemists** に相手の認識構造に絶妙に適応した対話を行うことを可能にするのである。ここでは、**Strategist** 段階でなされるような、自己を絶対化したうえで、同等のレベルへと他者をひきあげようとする「責任意識」が積極的に拒絶されることになるのはいうまでもない。

ある価値を絶対化したうえで、それを基準として他者の存在にはたらきかけることを意識的に忌避するという意味において、**Alchemists** のありかたは、**Strategists** のありかたの対極に位置するものであるということができよう。実際、**Susanne Cook-Greuter** (2002) の指摘するように、**Alchemists** は、時として、成長の潜在的な可能性を実現することに執着する **Strategists** のありかたにたいして最も批判的となる人々である。**Alchemists** にとり、**Strategists** のそうしたありかたは、本質的に、自己の信奉する価値を絶対化する自己中心的なありかたとして見なされるのである。また、そうしたありかたは、常に将来を志向することをとおして、現在という瞬間を疎かにするものであるという意味において、大きな問題を内包するものとして判断されるのである。

こうした姿勢を反映して、**Alchemists** は、組織活動の領域においては、しばしば、変革の触媒 (*catalyst*) としての役割を果たすことになる。自己の問題意識を人間存在の根本的な問題に向けながら、**Alchemists** は、その克服のために自己にできる最高の貢献を模索しつづけるのである。

その意味では、**Alchemists** の関心は、具体的な組織を構築・維持・発展することにたいしてではなく、むしろ、人間存在という問題そのものに向けられているということができよう。³ こうしたありかたにもとづいて、**Alchemists** は、

組織活動に変革の触媒として参画するが、自己の責任が終了したときには、そこからすばやく立ち去ることができる人々である。彼らの関心は、あくまでも、自己の必要性を無くすことにあるのである（つまり、組織が、自己の支援なしに、自己変革・自己組織することができるものとなることが希求されるのである）。

課題

Construct-Aware 段階の課題とは、人間存在の構造的な問題を洞察するその透徹した認識能力が醸成する絶望を克服することであるといえる。この発達段階において、あらゆる価値観は、人間が自己の実在感覚を増幅するために構築した虚構にすぎないことが認識される。そして、そうした衝動にもとづいて生みだされたあらゆる創造物が、窮極的には、朽ちていくものであることが認識されるのである。

Alchemists にとり、それらが永続するものであるという前提のもと、**Atman Project** の一環として、構築物の構築作業に参画することは、人間存在の根源的問題の温存に参与することにほかならない。**Alchemists** にとり、それは虚構の蔓延に荷担することにほかならないのである。

必然的に、こうした問題意識は、**Alchemists** の人間の創造活動にたいする信念を溶解する危険性を内包することになる。そして、ひいては、これは、この世界における人間の営為そのものにたいする絶望として結実する危険性をも内包している。

Construct-Aware 段階において、**Strategist** 段階を特徴づけていた「確信」と「自信」は失われ、われわれは、トランスパーソナル段階への関門となる危機（“**Dark Night of Soul**”）を経験することになるのである。

参考資料

- Susanne Cook-Greuter (2005). Ego development: 9 levels of increasing embrace. Available at <http://www.harthillusa.com/>
- Susanne Cook-Greuter (2005). On the development of action logics. Available at <http://www.harthillusa.com/>
- James Fowler (1996). *Faithful challenge: The personal and public challenges of postmodern life*. Nashville, TN: Abingdon Press.
- David Ray Griffin (1989). *God and religion in the postmodern world: Essays in postmodern theology*. Albany: State University of New York Press.
- David Loy (1996). *Lack and transcendence: The problem of death and life in psychotherapy, existentialism, and Buddhism*. Amherst, NY: Humanity Books.
- Bill Torbert and associates (2004). *Action inquiry: The secret of timely transforming leadership*. San Francisco: Berrett-Koehler Publishers.
- Ken Wilber (1995/2000). *Sex, ecology, spirituality: The spirit of evolution*. Boston: Shambhala.
- Ken Wilber (1997). *The eye of spirit: An integral vision for a world gone slightly mad*. Boston: Shambhala.
- Ken Wilber (2000). *Integral psychology: Consciousness, spirit, psychology, therapy*. Boston: Shambhala.
- Ken Wilber (2006). *Integral spirituality: A startling new role for religion in the modern and postmodern world*. Boston: Shambhala.

注

- ¹ James Fowler (1996) は、「恥」 (“Shame”) とは、自己が内包する高次の可能性を裏切ること起因する感覚であると指摘する（逆に、「罪」 (“Guilt”) とは、共同体の規範を逸脱すること起因する感覚である）。この定義によれば、**Strategists**とは、最も強烈に恥の感覚を経験することができる人々であるということができるだろう。
- ² ただ、ここで留意すべきことは、こうした言語にたいする問題意識が必ずしも言語の否定や忌避として結実するわけではないということである。こうした問題意識は、実際には、人間の精神活動において言語が果たす役割の重要性にたいする透徹した洞察にねざしたものである。それは、また、言語というものがもつ可能性にたいする尊重として顕現することになる。
- ³ もちろん、これは、こうした活動において、**Alchemists**が有能でないということではない。**Strategist**段階において確立されるそうした能力は、ここでも確実に継承されることになる。